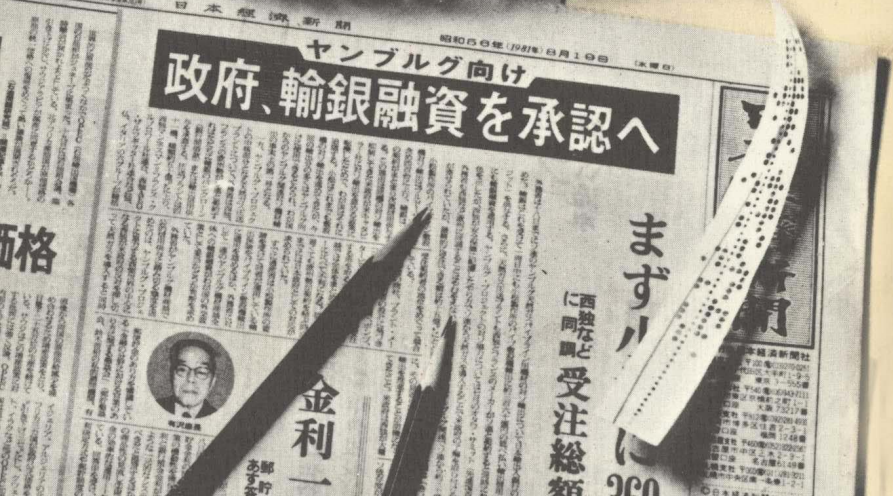
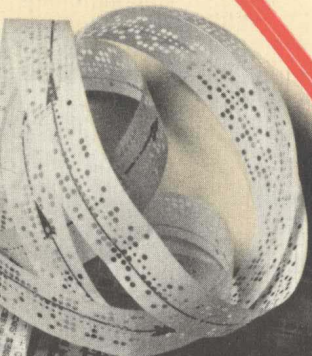
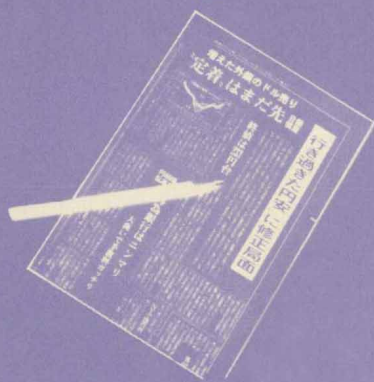


城野宏

経済情勢 判断学



経済情勢判断学



城野宏
講談社

経済情勢判断学

定価＝一、二〇〇円

一九八一年九月二十五日 第一刷発行

著者——城野 宏

© Hiroshi Jouno 1981, Printed in Japan



発行者——加藤勝久 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三—三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二三(大代表) 振替東京八一五〇

印刷所——慶昌堂印刷株式会社 製本所——島田製本株式会社

落丁本・乱丁本は、御面倒ですが、小社書籍製作部宛にお送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

0036-45899-2253 (0) (特)

はじめに

この本を書いたのは、日本人が自分たちの経済活動や生活づくりに対し、胸を張って自信と誇りをもってもらいたいからである。日本人の多くの者は、企業の中で働いているが、その人生はつまらない、生き甲斐のないものなのか、すばらしいロマンの中で、生き甲斐を感じることができなのか、その心のもち方を決定するのに参考になると思ったからである。

日本経済については、これまでの「経済学」（マルクス経済学も非マルクス経済学もふくめて）によって、たいていは非難の的となってきた。戦前は『日本資本主義発達史』といった観点から、封建性の強い独占資本主義で、恐慌が起って崩壊すると、毎年毎年言いつづけてきたのが「経済学」であった。しかしその「予言」とは反対に、日本経済は年々一〇パーセント前後という、ヨーロッパ経済の成長率の五〇年分を一年でやりとげて発展した。

戦後は敗戦の焼土を前にし、一時は「社会主義社会」にでもなりそうな気持をもった人も多かったようだが、忽ち経済を回復し、再び一〇パーセント前後の驚異的なスピードで発展した。

「経済学」の側からは、もう発展する事実を否定することはできない。戦前なら、発展の事実はある。でも、軍国主義で、戦争のための膨張だと非難の種をさがすこともできたが、戦後は軍備もなくなり、戦争のためという非難の種もなくなった。そこで発展を認めた上、「高度成長のひずみ」で公害が蔓延し、産業中心の経済で、福祉厚生はおろそかにされ、国民生活は脅かされ、人間の生命は危殆に瀕しているといった非難が大々的に宣伝され、やはり恐慌でそのうちに崩壊するのだと「予言」された。

しかし戦後の日本経済も「予言」とは反対に、恐慌が起るところか、やはり一〇パーセント、あるいはそれ以上の成長率で発展した。

しかし「経済学」の方からは、日本は中小企業が多く、「前近代的経済」だとか、まだまだ欧米に比べて生活基盤が弱いとか、とにかく欧米は立派だが日本はダメだといった非難が百出されてきた。

日本経済がその「非難」に値するようなダメなものなら、その中で人生を築き、日々の努力を重ねている人間にとって、ダメなもの、国民を危害するもののために懸命の努力をはらっている、ということになってしまう。大企業で働く者は、公害を蔓延させ、人間の生命をいためつけるために活動していることになる。これではどこにも生き甲斐を感じることはできないだろう。せいぜい、悪いこととは知りながら、妻子を養うためには仕方がないと、あきらめるより他、手はない。

日本経済は、「経済学」からずっと非難されてきたような内容のものではない。人間が生活を築き、幸せを求める活動の中で、これまでの人類経験の中で、もっとも立派に、画期的な成果を為しとげたのである。

この実態を見てとったなら、自分のやっていることは、立派なことをしているのであり、世界の人類にとって貴重な体験をつみたてているのだという自覚が生れ、自信と誇りをもって人生に取組めるはずである。この本は、日本経済の実態をつかんで、日本人が自信と誇りをもって、更に大きな進展をつくりあげるために書いた。

昭和五十六年八月二十五日

城野 宏

目次※經濟情勢判斷學

はじめに 1

第一章 日本経済発展の「秘密」 13

- (1) 日本に学ぼうという外国の人に、何を教えたらいのか 14
- (2) 実は「秘密」でもなんでもない 30
- (3) 日本経済は、どういう発展をとげたのか？ 39
- (4) どうしてこういう発展をしたのか？ 51

第二章 日本はなぜ世界一の長寿国になれたのか？ 67

- (1) この認識をもつことが一切の政治、経済論の出発点である 68
- (2) 日本はどうやって悪条件を克服し、長寿健康の条件をつくったか 73
- (3) 日本の医療と経済発展 83
- (4) 医療の発展と経済工業力 91

第三章 まだうろついている「経済神話」の幽霊 97

- (1) 日本がもっとよくなるためにはこの幽霊退治が必要だ 98
- (2) 「景気をよくするとインフレになる」のか!? 101
- (3) 「高度成長では福祉がダウンする」のか!? 104
- (4) 「大企業が栄えると庶民生活が貧窮になる」のか!? 106

第四章 「安定成長」と「不況対策」 115

- (1) なぜ景気浮揚、不況対策が提出されたのか 116
- (2) 「安定成長論」のタテマエとホンネ 121
- (3) 生産をおさえれば、物価は下るのか!? 124

第五章 民営と公営 129

- (1) 国営論の構造 130
- (2) 公営の実績が示すもの 132

- (3) 公営と民営の共通性と相違性 135
- (4) なぜ公営を有難がる考えがでてくるのか 140

第六章 怪談「不況脱出」

——経済白書とジャーナリズム—— 149

- (1) 経済白書とその「批判」 150
- (2) どういう経済状態になれば、「不況」でなくて「好況」だといふのか 154
- (3) なぜ輸出を制限せねばならぬのか 157
- (4) 国民経済の縮小減量の戦略による戦術的發展策は滑稽だし、無効である 161

第七章 「円高」とは何なのか 167

- (1) それは円価値の正常化である 168
- (2) 円の行方 177

第八章 中小企業の意義と責任 189

- (1) 日本経済の発展と国民生活は中小企業が支えている 190
- (2) 中小企業の大部分は「資本主義」企業である 192
- (3) 大企業は中小企業がなければ存立し得ない 199
- (4) 「日本経済発展の秘密」における中小企業 203

第九章 「自由経済」と日本経済 207

- (1) 日本は「自由経済」なのか 208
- (2) 「自由」のあり方は国によって違う 218
- (3) 日本経済の総合的把握 224

第十章 政府の「経済計画」 229

- (1) それは「社会主義」あるいは、戦時中の「国家経済計画」とは、本質的に異なる 230

- (2) 政府の「計画」は戦略なのか、戦術なのか 237
- (3) 「計画」と役人の行動 242

第十一章 エネルギーと石油

——その国民的課題——

247

- (1) 危機論と悲観情緒を煽りたてるだけでは対策とはいえない 248
- (2) 石油はエネルギーだけではない 250
- (3) 石油なしでは、日本人は今の一割しか生きられない 252
- (4) 石油はイランとサウジにだけあるわけではない。世界中を相手とせよ 254
- (5) 泣きごとばかりならべず、頭と足でさがせ 260

經濟情勢判斷學

第一章

日本經濟發展の「秘密」

(1) 日本に学ぼうという外国の人に、何を教えたらいのか

日本人のバイタリティー

日本の発展は、人類史的な奇蹟だともいわれる。日本のように継続的に、長期間に亘り、高い成長率で発展してきた国家や民族は、日本より他にはないのである。

今騒がれている日本の発展とは、「戦後の高度成長」であるが、日本はなにも、第二次大戦後だけ「すばらしい発展」をしたわけではない。明治、徳川、戦国と歴史を辿ってみれば、継続的に高度成長をつづける力のある民族であることがわかる。戦国、徳川は封建時代で、生産力は停滞し、沈滞した社会という感じをもつものが多いようだ。しかし、戦国の世でも、種子島に一挺の鉄砲がもたらされたら、その数年後には全国に普及してしまった。

それも輸入した鉄砲ではない。日本で製造して大量供給ができるようにしてしまったのである。それだけの冶金工業、鍛造工業、火薬製造の化学工業をもち、その技術者をもたなければこんなことはできない。その生産業を組織し、大名の兵器需要に結びつけてゆく有力な商社活動がなければ